

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2011年度研究成果報告書**

|                   |   |                |  |
|-------------------|---|----------------|--|
| <b>研究科名</b>       | 立教大学大学院文学研究科超域文化学専攻   |                |  |
| <b>研究代表者</b>      | 在籍研究科・専攻・学年   | 氏名             |  |
|                   | 立教大学大学院文学研究科超域文化学専攻<br>博士前期課程2年   | 末永 雅洋          | 印  |
| <b>指導教員</b>       | 所属・職名   | 氏名             |  |
|                   | 立教大学文学部教授   | 野中 健一          | 印  |
| <b>自然・人文・社会の別</b> | 自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会 | <b>個人・共同の別</b> | <input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名 |
| <b>研究課題名</b>      | 東北・関東・中部地方における昆虫食文化の地理学的研究  |                |  |
| <b>研究組織</b>       | 在籍研究科・専攻・学年   | 氏名             |  |
|                   | 立教大学大学院文学研究科超域文化学専攻<br>博士前期課程2年   | 末永 雅洋          |  |
| <b>研究期間</b>       | 2011年度  |                |  |
| <b>研究経費</b>       | 200千円   |                |  |

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

福島県内における昆虫食の目的、採集・調理活動の実態、学校の教育的効果、地域振興策の経済的・社会的影響を明らかにすることを目的とする。個人または小グループで採集する人には「昆虫食の頻度(月に何回)」、「採集・調理・食の時間帯」「年齢層」、「性別」、「採集・食の目的」、「採集要領」、「採集に使った道具」、「イナゴ捕り・調理歴」を項目ごとに調査して、そのパターンから伝承の基軸的な要素になるであろう採集活動の楽しさや面白さを見出していく。地域振興策については、「大会への参加回数」、「大会への感想」、「普段は昆虫採集をするか、する場合頻度はどのくらいか」等を参加者に聞き取り調査する。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 環境教育 ] [ 昆虫食文化 ] [ ルーラル・ツーリズム ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

筆者は、2011 年に約 30 日間調査を行った。そのデータの収集方法を大きく 2 つに分けて示す。

第 1 に福島県中央部におけるイナゴ採集の方法に関する知識と技術、頻度、調理方法、調理品の使い方、採集者の年齢層や属性の聞き取り・観察調査である。採集者約 15 名を対象に調査を行った。

第 2 に、群馬県吾妻郡中之条町でのイナゴ捕りのイベントの企画・実行での関係者への聞き取り、昨年・今年のイベントへの参加、参加者への聞き取りとアンケート調査から得られた資料である。主催者である山里テーマパーク部会のボランティア 3 名、大会の会場の提供者である寺社原地区の住民 3 名、2010 年・2011 年の大会の参加者のべ 52 名を対象にした。

その他、比較のため中部地方の事例を文献より参考にした。

調査地域となる福島県中央部の郡山・須賀川盆地は水田化が進んだ地域である。この郡山・須賀川盆地は阿武隈川及びその支流によって浸食された台地が大部分を占め、低地は狭い。この低地には古くから水田が開けていたが、用水の便が悪く、台地を刻む頭部浸食谷を利用して築造した多数の溜池によって灌漑されていた。現在では本宮盆地以南、郡山・須賀川盆地などいずれも水田が卓越し、郡山地域の水田面積 45,500ha のうち 46%はこの 3 盆地に集まっている。会津盆地の 16,000ha をしのいで、ここは福島県内第一の水田地帯になっている。会津地区は耕地が会津盆地にほとんど集中している。他は、猪苗代町の猪苗代湖北岸地域に水ややまとまった耕地がある。磐梯・猪苗代地区の約 70%が水田である。

福島県内では、海岸部、山間部を含め広くイナゴが食されていた。中通り地区は郡山市、須賀川市、福島市、白河市、西郷村、田村市、鏡石町、鮫川村、平田村、伊達市が挙げられ、広範囲にわたってイナゴが食されていた。会津地方は猪苗代町、下郷町、喜多方市、湯川村、浜通り地方は浪江町、いわき市でイナゴが食されたことが明らかになっている。

イナゴ捕りを地域振興に取り入れている群馬県吾妻郡中之条町は、群馬県の北西部、内陸部にある人口 18,000 人弱の中山間地域の町である。少子化と併せて都会への人口流出が進み、年々人口も減少傾向にある。まちづくりを行う上では交流人口の増大をはかることが重要になる。地形は、森林が面積の 8 割以上を占め、盆地・河岸段丘・丘陵地などが見られる。

1. 福島県内におけるイナゴの採集技術と調理方法を見ることにより、捕獲・調理方法には地域によってヴァリエーションがあることが明らかになった。本調査では、イナゴ目的の採集活動で他種の動物を同時に捕獲する行為は見られなかった。採集状況に関しては時期・時間帯・場所・採集者・グループ・採集技術・食の目的・調理方法にも地域差があつて本調査地域も特徴的な性格を有していることが明らかになった。また、そうした採集活動の特徴は福島県内の一部の小学校におけるイナゴ捕り行事にも反映されている。

イナゴは水田のみ、つまりイネの植生地帯のみならず、用水路・畦道・土手にも生息しており、採集活動の場所も稲穂が実る地域にとどまらなかった。また、その中でもイナゴが多い場所があり、例えばヘビやクモなどの多く生息する地帯やイナゴの選好性を有する植物につく傾向を有することは、毎年大量にイナゴを採集する常連者の聞き取りから明らかになっている。また、稲穂が実る地帯には足を踏み入れてはいけないというルールが採集者のマナーとして存在し、イナゴの多い場所の中でも制限区域があることが判明したが、その他のルールについては厳しく制限されていることは無く、比較的自由度の高い活動と言える。

採集時間についても本調査地域ではイナゴがほとんど動かない早朝のみならず、よく跳ねて捕りにくいと言われる昼間にも採集者がいることは特徴的であった。そのため、早朝から夕方にかけてイナゴを捕る採集者も存在し、10 日間に 1 人で約 10kg 以上採集する 70 代から 80 代の高齢者もいた。そのことから、一時間ごとにイナゴの採集量を量る本調査が可能になったのである。この結果、採集量と時間帯の相関関係のグラフから見てもわかるように、早朝・夕方にイナゴが捕りやすいことが必ずしも採集量に影響するとは限らないのではないかと考える。それは 2011 年度の調査においても変化は無かった。本調査地域では、採集方法についてもイナゴ袋に筒をつける・つけないで個人・家庭差があつた。また、筒をつけないのが女性に多いなど性差にもあらわれていることが明らかになった。筒を使用していない場合、捕らえる方ではない手(右利きであれば左手)のイナゴを多く収納するテクニックが手づかみでの採集活動に重要であることがわかった。

利用については食用が専らであるが、本地域では生のままで食べることは無く、調理を通して成り立つ

**研究成果の概要 つづき**

ていることがわかった。料理については、イナゴの佃煮が主要な調理方法であった。特に、本地域ではイナゴの糞を出さずに調理するという特殊な調理加工をしており、調味料も多くのザラメを使っていることがわかった。調理時間については水煮の時間が家庭によって差があり、少ない家庭で30分程度、多い家庭で3日から4日程度であった。調理には地域差・家庭差が存在するが、特に調理方法・味の家庭差については、近隣の高齢女性たちの話題の種となっている。

利用目的に関しては本地域ではお茶受け・酒のつまみなど副食的に利用されているケースが多く、採集者・調理者(両方が同一人物の場合もある)が食用として利用している場合もあれば、親戚・近隣住民などに「おすそ分け」しているパターンが見られる。本調査地域ではでは小学校を除き、採集者・調理者がイナゴを販売している事実は見られなかった。こうした点から食用としての利用は、経済的価値によるものよりも親戚・友人同士の関係強化につながるような社会的意味を内包して成り立っているものといえる。原発以後は分配の形態にも変化が見られ、子や孫や親しい友人から長年行っているイナゴの贈答行為も制限するなどの変化が見られた。

2011年3月11日の福島第一原子力発電所の事故により、昨年と比べてイナゴ採集者が減ったという声が聞かれた。彼らはテレビ・新聞の情報で地域の空間線量は把握できてもイナゴにどれくらいの放射性物質が含まれているのかという情報が専らの関心事であった。福島県内における放射能汚染はイナゴ採集者の行動パターンを大きく変えた。

2. 群馬県吾妻郡中之条町のイナゴ捕りによる地域振興の主要な実施目的は、経済活性化、人びとのつながりの輪の醸成、子どもの教育であることが明らかになった。実際のイベントの収支の上では赤字となっているが、コミュニケーションや自然とのかかわりを志向した子どもの教育に「役立っていない」と断ずることはできない。それはアンケート調査の結果に示されている。

しかし、教育を志向する上で、イベントを通じてイナゴ食を積極的に取り入れているかと言えば不十分な点が残る。イベントは現在のところイナゴ捕りとジャンプの部に特化されていて、イナゴ食は本格的に取り入れられていない。イナゴ採集についても年長者の巧い人が次世代にコツを教えるといった取り組みもなされていないため、イナゴ捕りを通じた教育的側面が充実しているとは現時点では言えないと考える。したがって、この行事は「伝統性、イベント性」のどちらを志向しているかと言えば「イベント性」を重視していると言える。「自然とのかかわり」を求めるのであればイナゴでなくても他のイベントで充足できる可能性があるため、他のイベントに取って代わることがたやすくなされる危険性があるのかも知れない。しかし、それでも筆者は「イナゴンピック」は中之条町のイベントとして残る可能性があると考えている。それは対象生物であるイナゴにかかるコストが無いからである。賞品代や土産代も地元の農産物であるため、町のPRとしての役割も果たしている。主催者は第2回大会で温泉宿泊券3万円分を賞品にあてたが、主催者は参加者が「純粹」にイナゴを楽しみに来たと判断し、第3回からは農産物だけの賞品とした。2011年度は第4回を数えるが、参加者は減るどころか増えているのである。しかも、2010年度よりも2011年度の方が中之条町以外からの参加者が増え、外部からの認知度が高まっている。50名限定であるため、大幅な参加者増は見込めないが、人数が少ないことによる行事の中止には影響が無いと見られる。イナゴンピックには家族連れが多く、娯楽性を持ったイベントとして認知されている。実際に子どもが来たいから来たという大人もおり、子どもの重要性が増している。寺社原集落の住民にとっては数少ない年間行事の一つにもなっており、集落内の結束力の強化が期待されている。行事には寺社原集落だけでなく、他の中之条町のボランティアが参加しているが、集落側が労働力を提供する代わりに、役場主導のボランティア団体が農産物を買っている。中之条町の地域振興は行政の一枚岩のイベントではなく、「行政」・「受け入れる集落」の二重構造になっており、それぞれで大会に対する期待の内容が異なっている。だが、両者ともに経済活性化を強く志向していないところは特徴的である。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 末永雅洋 2012. イナゴの採集と調理活動—福島県中央部を事例として—. 史苑 72(2): 29-36.

④ イナゴの採集と調理活動—福島県中央部を事例として— (2011年7月2日 立教大学史学会 於 立教大学)

④ イナゴの食慣行・学校教育・地域振興策の現状と今後の展望—福島県・群馬県を事例として— (2011年11月13日 於 人文地理学会 )